



石神井中だより

練馬区立石神井中学校

校長 櫻井 弘

令和4年6月日

第3号

「好奇心から」

校長 櫻井 弘

校内を巡回しながら生徒の皆さんの生活の様子を見ていますが、先生の話落ち着いた態度で聞きながら授業に取り組んでいる姿が、実に素晴らしいといつも感心しています。ただ、どういう心境で静かに授業を受けているのか。モチベーションが気になることもあります。例えば、「先生の話は静かに聞くものだと思って我慢しているのか」、「進路のことを考えて死に物狂いで頑張っているのか」、「それともその授業が自分にとって興味深く聴き入っているのか……。」なかなか表面的な態度からは読み取れません。

昔、担任していた生徒からこんな直球の疑問をぶつけられたことがあります。「先生、学校の勉強って社会に出て何の役にも立たないことの方が多いのに、何で勉強しなければならないんですか？」確かに体育の授業で行う跳び箱運動などは、社会生活に直接つながっているようには思えません。しかし、石神井中の生徒諸君ならば、もうこの疑問への答えは分かりますよね。知識を得たり、体験したりすると、ものの見方が変わったり、体が適応しようと発達したりするのです。広く・深く・強くなると言い換えてもいいかもしれません。そして、義務教育9年間で学習する知識や技能は、社会で生きていくために必要な最低限の分量が程よく配当されています。その100%習得するというよりも、そこから自分が興味をもったものについて、自分でさらに知識や技能を獲得していこうと意欲的に取り組むことが大事になります。つまり、好奇心をもつことです。好奇心こそが全ての基となるのです。皆さん自身の感性を大切に、様々なことにチャレンジしてください。

ジャーナリストの池上彰さんは、著書『なんのために学ぶのか』の中で、ご自身の体験談を交えながら学ぶことの意味について語ってくれています。中でも「知識＝教養」ではなくて、自分の頭で考え続けることで教養が身に付く、という部分が腑に落ち共感しました。いくら知識を丸暗記してもそれ自体に意味はなく、知識を使って自分なりに考えることで人間力が確立していくのだ。これはとても説得力のある言葉だと感じました。

昨年度から実施されている新学習指導要領でも、習得した知識や技能を活用して、どういうふうに思考・判断・表現に結びつけるか、そして、そのためにどう工夫し根気よく取り組むかがポイントとなっています。授業でも覚えることより、考え・まとめ・発表するなどの体験活動を多く取り入れ、自分の考えをもつこと、考えを巡らせ、失敗を恐れずに柔軟な発想ができることを大切にしています。

今後の社会では、何においても自分で考えることが大切です。そして、考えるきっかけになるのは好奇心をもつことのできる感性（豊かな情操）です。皆さんにはそのことから、調べてみよう・やってみよう・何とかしようなど、主体的に考えるモチベーションを大切にしてほしいと思います。